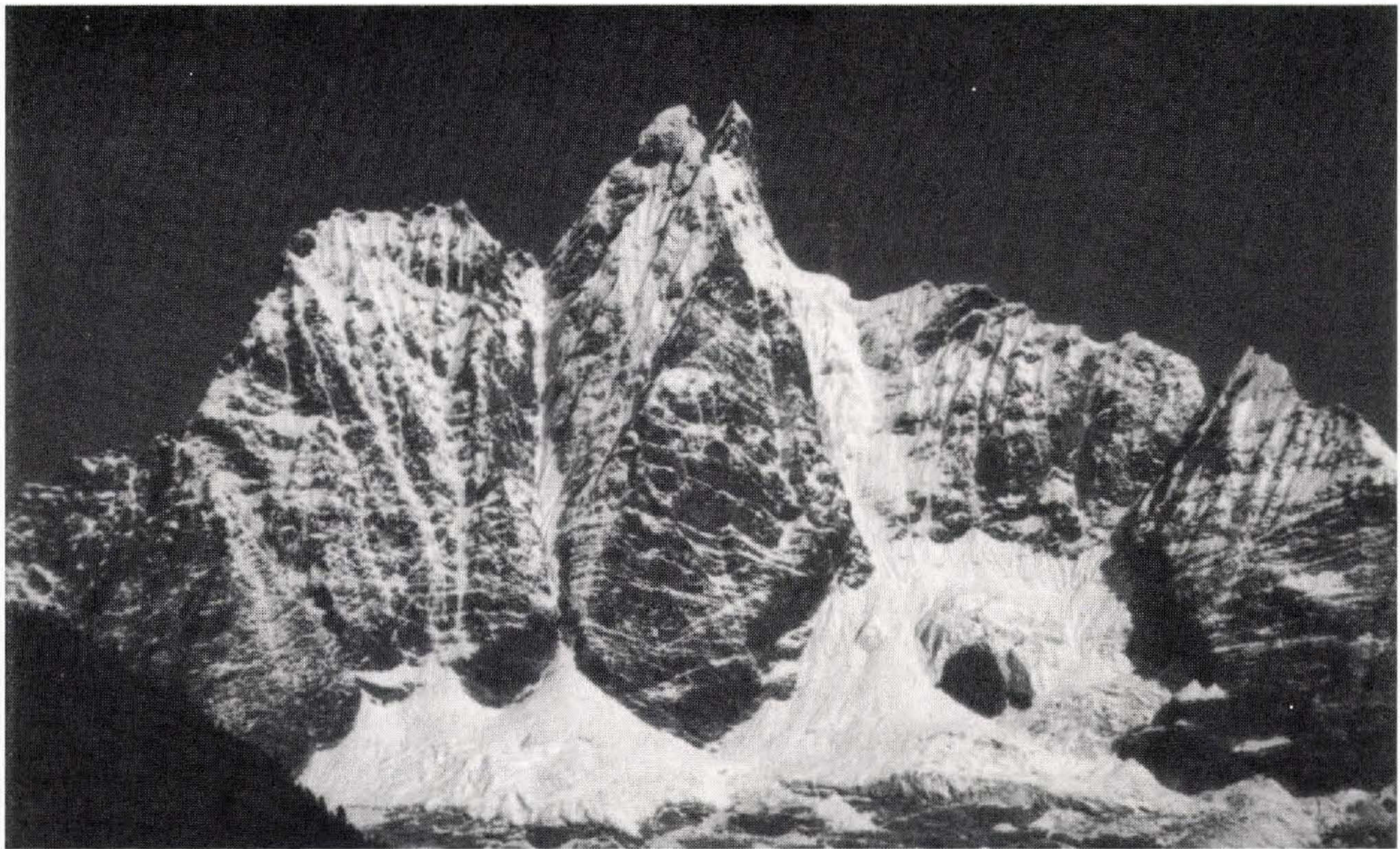


針葉樹会報

第96号
2002年6月



目次

エベレスト街道トレッキング……………	海老澤 齊	2
ツール・ド・シルクロード続編 (自転車でシルクロードを走る)……………	春日井 実	5
赤岳・60代締め括りの山……………	佐薙 恭	7
チベットのアルプスへ —未踏の念青唐古拉山脈東部を探る— 2001年10～11月……………	中村 保	9
ミニヤコンカ近況 2002年2月12日～16日……………	金子 晴彦	13
三スラ……………	宗像 充	21
会員便り……………		23
一木会通信……………		25
編集後記……………		28

表紙写真Ⅱ東チベット、念青唐古拉山脈の

サマラサ6132m / 中村保撮影

発行日 2002年6月15日
発行者 針葉樹会
印刷所 ヤマノ印刷(株)

針葉樹会報
第96号

編集人 佐薙 恭
〒240-0066
横浜市保土ヶ谷区釜台町5-4-806
会報幹事 / 佐薙 恭、井草長雄
川名真理、大谷公重

エベレスト街道トレッキング

海老澤 齊 (昭28年)

12月下旬、横山先輩の企画により4人(横山、海老澤、高崎、佐藤)でネパール・ヒマラヤのホテル・エベレスト・ビューからルクラまでトレッキングを行った。

連日の快晴、紺碧の青空、時々刻々変化する最高峰のエベレストの山容をはじめ、クンブ山域(エベレストを中心にした3000m以上のナムチャから北の山域で、国立公園にも指定されている)の名峰を心ゆくまで堪能出来た楽しい山行であった。

今回の計画は、下りを主体に山を楽しむコースを選び、平均年齢72歳の一同にとっても無理のないものとした。

3880mの高所にあるホテルへは、カトマンズからシャンポチェ飛行場までチャーターしたヘリを利用し、徒歩で1時間で到着。下りは8名のガイド、ポーター達を伴いナムチェ、パグデインを経てルクラまでテント2泊のトレッキングをする。

これは山の記録ではなく、思いつくままのメモを書き留めたので会報には場違いの感があるがご容赦を願う。

2001年12月19日

羽田に集合、関西空港経由、ロイヤル・ネパール航空直行便で9時間、現地時間19時、カトマンズ空港着(時差3時間15分)。

12月20日

カトマンズ盆地の朝霧が晴れ出した8時50分、チャーターしたヘリで機上の人となる。細かな振動はあるが、高度が上昇するにつれ、ヒマラヤの山々が眼前に広がり、はるばるやってきたことを実感する。互いにカメラのシャッターを切るのも忙しい。

30分でルクラ Lukla、北に向かい間もなく前方に待望のエベレストが現れる。10分で3800mのシャンポチェ Shyangboche 飛行場に着陸、東京から1日で富士山頂と同高度のヒマラヤの地にいること夢の如しである。

今回のガイドをするシェルパのリンジー君や、ポーター達の出迎えを受ける。ウエルカムドリンクの熱いレモンティーを飲みながら、高度順応のため約1時間休憩、呼吸を整える。飛行場の南に、雪をいただくタムセルク、コングリ、ヌプラの山々に新鮮で強烈な印象。ホテルへはポーターがザックを担いで先行

したのでサブザックのみの身軽さ、ゆつくり歩き始める。30分でシャンポチェの丘にホテルが、その上方にエベレスト、ロツェ、ヌプツェの雄姿が鮮やかに顔を出す。

11時30分、ホテル到着。諸設備の整った本格派、静かで快適。宿泊客は今日明日は我々のみとのこと、不景気の影響をここでも感ずる。

昼食、軽くビールで乾杯。フルコース並の料理、ジュース、スープ、コーヒーで水分を充分補給し元気となる。

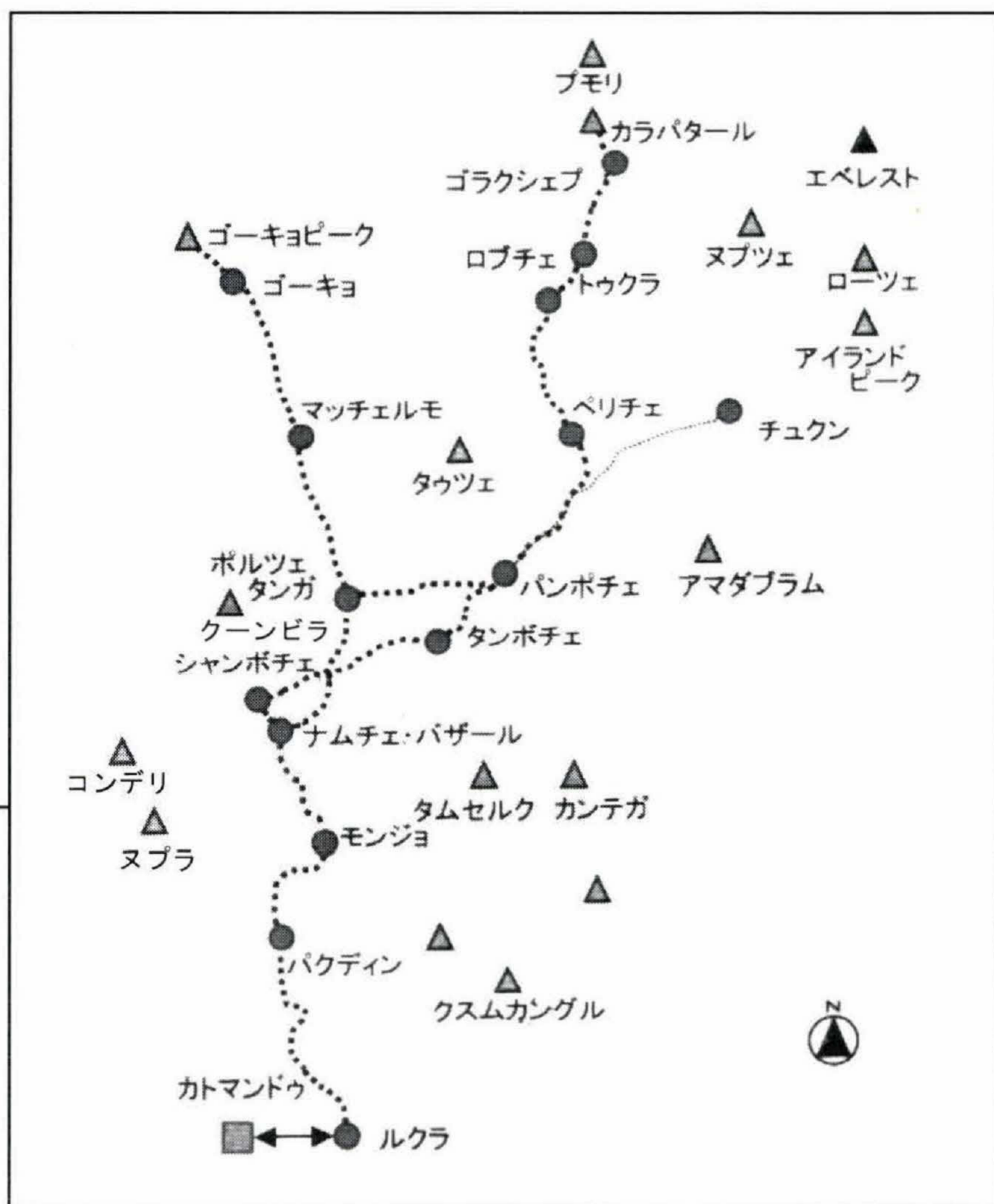
午後、シャンポチェの丘の一隅にある故中島寛君の慰霊碑へ追悼表敬する。「やみがたきおもい：ここに」の碑文に心を打たれる。

外は暖かく心地良い。エベレストの峰から雲が沸き始め、ロツェの頂にかかってくる。ホテルにもどり小休止。

バードウォッチャーの佐藤君は双眼鏡片手に鳥の観察に余念がなく、鳥を求めて周囲を歩き回り、凶鑑と見比べて確認に忙しく元一杯。

夕刻、夕日に輝くエベレスト、徐々に暗黒に変化する谷間のコントラスト、山の変化は止まることがない走馬灯の如しである。

日が落ちると外気温は急速にマイナスまで下がり、防寒着が必要となる。夕食後ダイニングルームの暖炉で談笑するが、ガラス越し



に眺める外は満天の星空。
 19時30分、早いのが就寝、部屋には小型温風器1台のみなので寒さが身に凍みるがベッドには大型湯タンポが2ヶ入り快適。
 先ずは3880mの第一日を終る。夕食時に軽い高山病の初期症状が出た者もでたが、幸い2時間程度の酸素吸入により回復、事無きをえた。
12月21日
 快晴、朝日を仰ぐべく、6時30分起き出し

の石造りの家々が多く、学校、仏教寺院の石塔、寺院もあり比較的豊かな地域と感じられる。遊んでいる子供達も明るく活発。一方、若者の姿は季節外れなのか余り見当らない。寺を訪ね、何がしかの寄進をしたところ、堂守がロッカーの鍵をあけ、おもむろに雪男・イエティのミイラと称するものを見せてくれたので有難く拝見した。
 集落を一巡しホテルへ戻る。僅か1000m余の登りとはいえ、意外に息が切れて苦勞す

テラスへ出る。寒さは厳しいが防寒具を着ているのでそれほど感じない。エベレストの峰から徐々に輝き始め、次第に明るく広がる変化は見飽きない眺めである。朝食後、丘の麓のクムジュン Khumjung の集落を訪ねる。4000m超への挑戦は時間もかかるので断念する。
 クムジュンは比較的平坦な地形で、ロッジ兼レストラン

る。テラスでの昼食、外国人トレッカーも昼食に来ていて賑やかである。皆それぞれ、山の眺めに感動の様子である。
 午後は休息、屋上のサンルームはガラス張り、ポカポカの陽気、汗をかく暖かさ。眺めは正面にエベレスト、アマ・ダブラム、後方にコンデリ、ヌプラの山々など壮大である。
 15時、全員1号室に集合し、横山氏持参のフランスワインでエベレストに乾杯、盛り上がる。
12月22日
 8時、ポーターにザックを預けた身軽な出発。シャンポチエの丘から急坂をナムチェに向って下ること30分で、ナムチェ Namche Bazar の集落に入る。家並みも多く、街道一とのこと。大荷物を背負うポーター、ヤクやゾッキョ(注参照)に背負われた荷駄の列など、人、もの、ヤクの往来が賑やかになってきている。
 途中、村人や登って来るトレッカーと行き交い、ネパール流挨拶「ナマステ」も使い慣れてきた。村人によっては時に、歩みを止めて、丁寧に合掌してこうべを垂れて「ナマステ」と返礼されるには恐縮する。トレッカー達は歩きながら気軽に声をかけあっていく。
 狭い石畳の道の左右に雑貨、みやげ物、スポーツ店、英語の看板を出したロッジやホテル

ル、レストランが並び、店頭にはカラフルな土産物、手工芸品がところ狭しと並べられ状況である。

今日は土曜日とあって、村の入口広場では定期市（ハート）が開かれ、この地域のシエルパ族の人達が、食料品や日用品を求め集ってきている。人また人の雑踏、売り手は遠くはチベットから、南はカトマンズやインド方面から荷物を背負い何日もかけてやってくるとのこと。扱われているものも多種多様——衣類、雑貨、米、野菜、果物、あらゆるものがあり、壮観でもある。

9時30分、バザールの雑踏を後に、ラルジャ・ドータン *Larja Dobhan* の吊り橋まで一気に下る。吊り橋は相当の高度感があり、橋上でゾッキョの荷駄隊と行き交うことには怖ささえ感じたので、橋脚の狭い階段上で待つことにした。その目の前で方向転換し、急な階段を下りていくゾッキョには感心させられるとともに愛嬌さを感じた。

12時、*Jorsale* で昼食。ポーター達が先行し準備をして待っていた。

13時、ここからはゆるやかな坂道、吊り橋を何回か渡り、16時テント場となるパクディン *Phakding* のエベレスト・ゲスト・ロッジに到着。横山を除く3人は行きすぎて、ポーターに呼び止められ戻ってきた。

高度差1400m、約17kmの本日の行程、若干の疲労感が残る。テントの設営、就寝の準備を行い、ロッジの食堂で夕食、ポーター達の作る献立はなかなかのもの、ネパール食を賞味する。

12月23日

6時30分、ポーターの差し出す熱いモーニングテイーで起床。洗面器一杯の湯で洗顔、ザックを片付けポーターに渡して朝食。

8時、出発。村はずれの巨大なマニ石（仏典が彫刻されている岩）を見ながら、右下には蛇行するドウト・コシ川を眺め、ガット *Ghat* まで下る。ここから軽い登りとなりナシムバン *Nachipang* で振り返ると、遥かにシャンポチェの丘が認められ、懐かしさを感じる。チツプリング *Chheplung* を経て、飛行場のあるルクラ、エベレスト・ロッジに11時30分着。予定より早い。休憩、昼食。

13時、テント場へ入る。歩き終えた安堵感から気分は爽快。14時、ロッジに「ホットシャワー有り」というので3人で出掛けたが、期待外れ、ホットには程遠いぬるま湯程度なので体を拭いて着替える。さっぱりする。

テント場は陽射しも暖かく、のんびり、のどかな集落が眺められる。山も違った趣、東にメラ *Mera* 6461m、岩山のノーレック *Naulekh* 6363m、西にナンボル *Numbur*

6959mの山々。

15時、食堂テントも完成、全員集合、無事な完走、連日の快晴に感謝の乾杯、盛り上がる。

12月24日

8時50分、ルクラからヒマラヤの眺望を楽しみながら40分の飛行でカトマンズ着。帰路、カトマンズの展望台と知られるナガルコット *Nagarkot* に1泊、ヒマラヤのパノラマ的眺望を眺めた。

12月25日

カトマンズに戻り、代表的ヒンズー、仏教寺院、バザールを散策。夕刻、ホテル・ヒマラヤで倉知、三森両君を交えて懇談する。

23時40分、ロイヤル・ネパール航空直行便にて関西空港経由、26日午後、羽田空港着、8日間の旅を終了。（横山氏は更に1週間カトマンズに滞在、新年1月2日に帰国）

注…ゾッキョとはヤクと牛の交配種。

ツール・ド・シルクロード

(自転車でシルクロードを走る) 続編

春日井 実(昭31年)

(承前)

今回の参加者は30名でその内訳は教職関係10名、会社員8名、自営業5名、定年退職者5名、主婦・中学生各1名で、年齢は12歳から67歳(即ち小生)までで平均年齢は54.5歳で、うち女性は4名であった。

初参加10名のうち自転車のベテランは2名だけで、残りはシルクロードの走破にロマンを感じての参加でマウンテン・バイクは初めてという人ばかりであった。

第2日 中央アジアの2大河の一つシル・ダリア河を渡るとすぐに、カザフスタンの領土が楔のようにウズベキスタンに入り込んでいる所を通過することになった。一応検問所がありこの間は通行中は休憩も写真も撮ってはいけないという。この炎天下25kmも休まずに走るのは辛すぎるので、一度だけバスの中で休憩をとった。ウズベキスタン第一の都市

タシケントから第二の都市サマルカンドへ行くのに、他国の領土を通過しなければならぬなど島国の日本では想像もつかないことである。道路部分だけでも買い取りたいとカザフスタンに申し入れたが駄目だったらしい。この日はシナズという比較的大きな町まで走ったが、到着はやはり一番暑い2時頃になってしまった。

第3日 炎天下の走行を避けるために、4時起床、5時朝食、6時出発とした。朝食といってもビニール袋にはいったサンドイッチ、トマト、ゆで玉子を貰うだけだ。

この日は今回の走行で唯一の峠越えがあった。両側から山が迫り景色が一変する。道路も心持ち狭くなり我々が一車線とると渋滞するので警察の部長からバスに乗るように指示がでたが、我々はシルクロードの全行程を自分の足で駆け抜けることを目標にしているからと説得し、結局何かあったら責任は我々でとるという一札をいれてやっと許可をとった。そのために少し走っては路肩で休み後続車をやり過ぎしてまた走ることの繰り返しとなったので、唯一の登りで標高差は400mもあったがたいして苦にならなかった。早出の効果があつて、この日は目的地に12時頃に着いた。

第4日 スタート直後少しだけ登りがあつ

たが、あとはサマルカンドへ向けて、下る一方であつた。見た目では分からないような緩い勾配でも、自転車は正直で走行は本当に楽、最高速度も42kmを記録した。こうなる周囲の景色を見ながら走る余裕も出てくる。道路の両側は広大な綿花畑で世界第2の綿花の輸出国であることが分かる。ここでは未だに手で摘むので品質は世界一であると自慢している。りんごや洋梨の果樹園も時折り見られる。桑の木があるのも主要な産業としての養蚕があるからシルクロードならではの。

この日の異変はいつも元気で朝の準備体操の音頭をとったり、走行中も先頭にたつてリードしていた副隊長が体調を崩してバスに乗ったこと。今日も12時前にサマルカンドに到着できた。午後はフリー・タイムで各自思い思いの観光地を訪れた。

翌朝、副隊長は夜中に容態がおかしくなり入院し、ここでは治療ができないので、急きよパリから特別機を仕立てて帰国することになったと報告があつた。病名は脳梗塞らしいとのこと。私よりも10歳も若い56歳だし、そんな気配が全く感じられなかっただけに意外な気がした。この手配のために日本からの添乗員と通訳のマヒラが徹夜で奮闘してくれた。サマルカンドには3泊して観光と休養を兼

ねた。ここはもちろん紀元前からの歴史があるが、破壊が繰り返されて、現存するのはティムール帝国以後のものだけである。15〜17世紀に建てられたサマルカンド・ブルーといわれる青いモスクは中央アジアの紺碧の空の下、強烈な印象を与えてくれた。観光案内ではないので詳述はしないが、地元の人は暑いので歩かない街を3日間歩いて堪能した。一般の観光客は行かないシャフリサブというティムールの生地にも行った。白く雪をかぶったパミール高原の支脈が見えた。

サマルカンドの印象は物価が安いこと。例えばビールは中瓶で60円だが、冷えていないのが玉にきず。タクシーも値段交渉をしてからたつぷり乗っても40円くらい。米ドルでの買い物は喜ばれる。英語を話せる人がほとんどいないと聞いていたが、結構若い人は積極的に話す。一人歩きも危険ではない等々の経験もした。

走行第5日 サマルカンド3日間を終わり、後半の走行に入った。タシケントからここまでは大統領も飛行機ではなく車で来るというので、道路は整備されているが、ここから先は事情が違う。例のビニール袋入りで配られるサンドイッチ朝食を食べ5時半出発。朝のうちは風を切って走るので半袖シャツでは寒いくらいであった。路面は荒れてきたが、緩

い下り勾配で快適な走行が続く。両側はあいかかわらず綿花畑で変化がないので、遠くに見える高い木や標識を目標にしてひたすら走る。今日の泊まりは軍隊の施設で写真は禁止。外出も遠慮して欲しいといわれた。西日は射し込むし、夜は建国記念日の前祝いでどんちゃん騒ぎがあつて寝られたものではない。部屋には蚊がブンブンでシーツをかぶって寝についた。

第6日 ポプラ並木の美しい道路を走る。綿花畑用の灌漑設備が道路に並行してどこまでも走る。15kmまたは50分毎の休憩にピッチが変わった。つまり目に見えない緩い下りなのだ。走っていることに取り立てて書くような事はもうないが、休憩の時は必ず近所の子供達が集まってくるので、折鶴を作つてやる人、写真をとつてあげる人、飴玉を配る人、ロバに乗せてもらう人などいろいろあつて面白い。

この日の泊まりは所謂民宿で、一家は家を明け渡して親戚の家にも行ったのであろう。床にふとんが並べてあるだけで、サマルカンドのホテルから来たウエイトレスがシーツと枕カバーを配って歩くので清潔ではあるが、蚊までは退治してくれない。トイレも50年前の日本と同じといえば分かつて貰えるだろう。**第7日** 走行班長から各自いろいろなポジ

ションで走ってみるようにと指示が出た。今回は初心者が多いので遠慮してリーダーのすぐ後という楽な位置では一度も走らず、最後部が多かったがこの位置は列が伸縮するので、スピードをあげたりブレーキをかけたたりで疲れる。今日は最年長に免じて先頭のリーダーのすぐ後を走ることにした。

リーダーは横2列になり隊員はその幅からはみ出さないようにして1列で走る。従つて2番目にいると前を遮るものがなく、50mくらい前を走るパートカーが見通せて誠に気分が良いし、ペースも安定しているので後部に比べて疲労が少ない。

ブハラに近づくにつれ緑が少なくなり、ついに地平線が見えた。生まれて初めて地平線を見たという人もかなりいたが、日本にいたら見る機会はないのだから無理もないだろう。

今夜の泊まりは牛と羊を飼っている民宿で、蚊に加えて蠅までが襲来した。中学生に扇子を渡して蠅叩きをして貰ったらあつという間に11匹も退治してくれたが焼け石に水。

第8日 昨夜はブハラ迄あと50kmの所に泊まったので、今日の走行に余裕がある。途中キャラバン・サライ(隊商宿)のある所に寄った。宿房の跡やドーム状の覆いがあり駱駝が水を飲めるように階段がついている珍し

い井戸があった。

昨年の中国のトパからここ迄一度もパンクをせずに1300kmも走って来られたので、パンクや怪我をしないように、最後は慎重の上にも慎重に祈るように走った。

ブハラ市内に走り込む。ブハラで一番高い45mもあるミナレット(塔)のあるカーラン広場を、観光客の視線を浴びながら3回周回した。苦勞をした昨年ほどの感激はなかったが、塔を見上げると矢張り込み上げてくるものがあつた。

ここから5kmほど離れたホテルへ滑り込んで今回のツアーは終わった。

市まるごと世界遺産に指定されているブハラには3日間滞在した。ブハラのことなら何でも聞いて下さいと云えるほど歩き廻った。

中学生も主婦もサラリーマンも満ち足りた顔をしていた。

成田で出迎えに来てくれた隊長から一足先に帰国した副隊長はリハビリに入ったという報告を受けて一同安心した。

(ウズベキスタン編 完)

(編集者注) 原稿の入ったファイルに、なぜか前半しか入っていないかったため、前号では尻切れとんぼになってしまいましたので、お詫びして後半を掲載いたします。

赤岳・60代締め括りの山

佐薙 恭 (昭31年)

2002年3月28日、まだたっぷり雪化粧の八ヶ岳主峰、赤岳に登った。その4日後が誕生日で私は満70歳になった。60代最後の山は、日頃親しんでいる丹沢辺りの低山ではなく、もう少しアルペンの風情の山をと思っていた。しばらく不義理をしているピツケルや12本爪にも出動の機会を与えてやりたい。どこに行こうか? 体力への配慮とアクセスの良さから赤岳を選んだのだった。2日かければ高度差1400mの雪山でも何とかこなせるだろう。幸い山本健一郎氏(S32卒)が付き合ってくれることになった。

前日、茅野から美濃戸口にかけてはずっと雨だった。明日は好天という予報に期待をつなぎ、バスの終点から雨具上下に身を固め、傘を片手に登り始める。美濃戸山荘を過ぎて北沢に入ると牡丹雪に変わり、更に赤岳鉱泉近くなる粉雪となった。

宿舎の鉱泉小屋は1983年4月、上原氏

(S33卒)と阿弥陀岳に登った時にも利用したが、すっかり一新され大きくなっていった。近く水洗トイレが新設されるそうだ。この日の同宿者は15人弱、約3分の1が山岳ガイドとそのお客らしい。自分にとっては初めて見るタイプの人種だ。炬燵に入つてうとうとしてみると、雪はやみ夕方には薄日が射し始めた。山本氏の都合で出発を1日ずらしたのが幸運を呼んでいるらしい。

さて当日、予報通りの好天だ。小屋入口の温度計はマイナス5度。どこでアイゼンをつけるか迷ったが、ガイド達が小屋の前で装着しているのを横目で見てこちらもそれに従う。途中の雪の山中では指が冷たくなって苦勞するだろう。オーバースボン、スパッツ、アイゼンなどという組合せはもう随分昔のことだから用意完了まで時間がかかる。アイゼンバンドの締め方はこれで良かったのかな?

7時出発。軽い登りをこなして行者小屋へ。前日の行程も含めてほぼ夏のコースタイム通りに歩いてきたので、今日の山は楽勝かと思つたのもここまで。これから先の高度差500mは傾斜もきつく予想以上のアルバイトだった。地藏尾根前半の樹林帯は前日の雪が結構積もっているが幸い先行者の踏み跡があるので忠実にそれをたどる。

苦しいのもつぱら下を向いて登っていく

と時々雪の上に長さ1センチ弱の細長い虫が動いているのが目に入る。春を告げる使者なのだろうか？ この虫は何を食べるのだろうか？ どんな一生を送るのだろうか？ 考えても答は判らない。

やがて森林帯を抜け、初めて振り返れば北アルプスが白く長い城壁を連ねている。この辺りから雪は締め、今度は先行者のアイゼンの爪跡が頼りだ。ほんの小規模ながら雪のナイフリッジも、雪壁のトラバースもある。クサリ場を過ぎ漸く主稜線に近づくとき赤い頭巾をかぶり雪焼けしてやけに黒い顔が稜線に向こうから顔だけ出してこちらを見ている。声を掛けようとして更に数歩登って行くとそれは登山者ではなく地蔵尾根終点に鎮座する石の地蔵様だった。すぐ横の天望荘から山頂まではまだ250mの高度差が残っている。大して重くない筈のザックだが躊躇なくここにデポしてカメラとチョコレートだけをポケットに入れて雪と岩のミックスした夏道を頂上に向う。

10時半過ぎ山頂着。文句なしに360度の眺望だ。中部山岳が全部見える。60代最後の山でこんな素晴らしい景観が与えられた幸運に感謝する。ハイシーズンには人で溢れるのだろうが今は人影もまばら、静かな山頂だ。そういえばこの頂きに立つのは2度目だが前

回の登頂は半世紀以上も前、高校1年の夏、山歩き入門直後の頃の単行だった。この2回の登頂の間のこととは今ここで振り返るには少しばかり長過ぎる。今日のところは兎にも角にも安全に下山するのが先決だ。

地蔵尾根上部通過までの雪が固い急傾斜の部分はアイゼンを引掛けないように慎重に足を運ぶ。何しろついでこの間、横浜駅の階段で派手に転んだばかりだから。森林帯に入ればもう安心だが、昨日の雪はこんなに積もったのかと今更ながら驚くほどの深雪で、しばらくはもてあそばれてしまう。

行者小屋からは鉱泉を経由せず南沢を直接下る。好天で気温も上がり始めたのだろうか、広い雪原状の緩斜面ではアイゼンが団子になり歩きにくい。ピッケルのシャフトで靴を叩く頻度が多くなる。たまり兼ねて山本氏はアイゼンをはずすが、南沢下部の樹林帯の道は凍っていて滑りやすかったという今朝会った人の情報が気になっていた小生は、美濃戸山荘前の車道までアイゼンをつけたまま下った。つるつるの氷の上で滑るといふ怖い目に会わなかった小生の方がどうやら正解だったようだ。

山荘近くの森でヒガラ20羽ほどの群に遭遇する。下界はすっかり春だが、亜高山帯常住のこの鳥にとっては季節はまだ冬モードな

のだろうか。3時半少し過ぎに美濃戸口のバス停に帰り着く。日当たりの良いベンチに座ってビールで喉を潤し、荷物の整理などして4時半過ぎの終バスで茅野へ。蓼科山から編笠山に連なるまだ白い山並を眺めながらバスはゆっくり下って行く。茅野では信州の山のフィナーレとして定番の、馬刺し、地酒、手打ちそばなど、地元山麓に別荘を持ち地理に詳しい山本氏案内の蕎麦屋で楽しんだ後、JRで帰宅の途につく。

すっかり暗くなった車窓を通してのぞいているのはどうやら満月のようだ。列車の振動に合わせて揺れる月を眺めながら、次の10年も又いい山歩きを続けたいものだと思った。

チベットのアルプスへ

— 未踏の念青唐古拉山脈東部を探る —

2001年10～11月

中村 保 (昭33年)

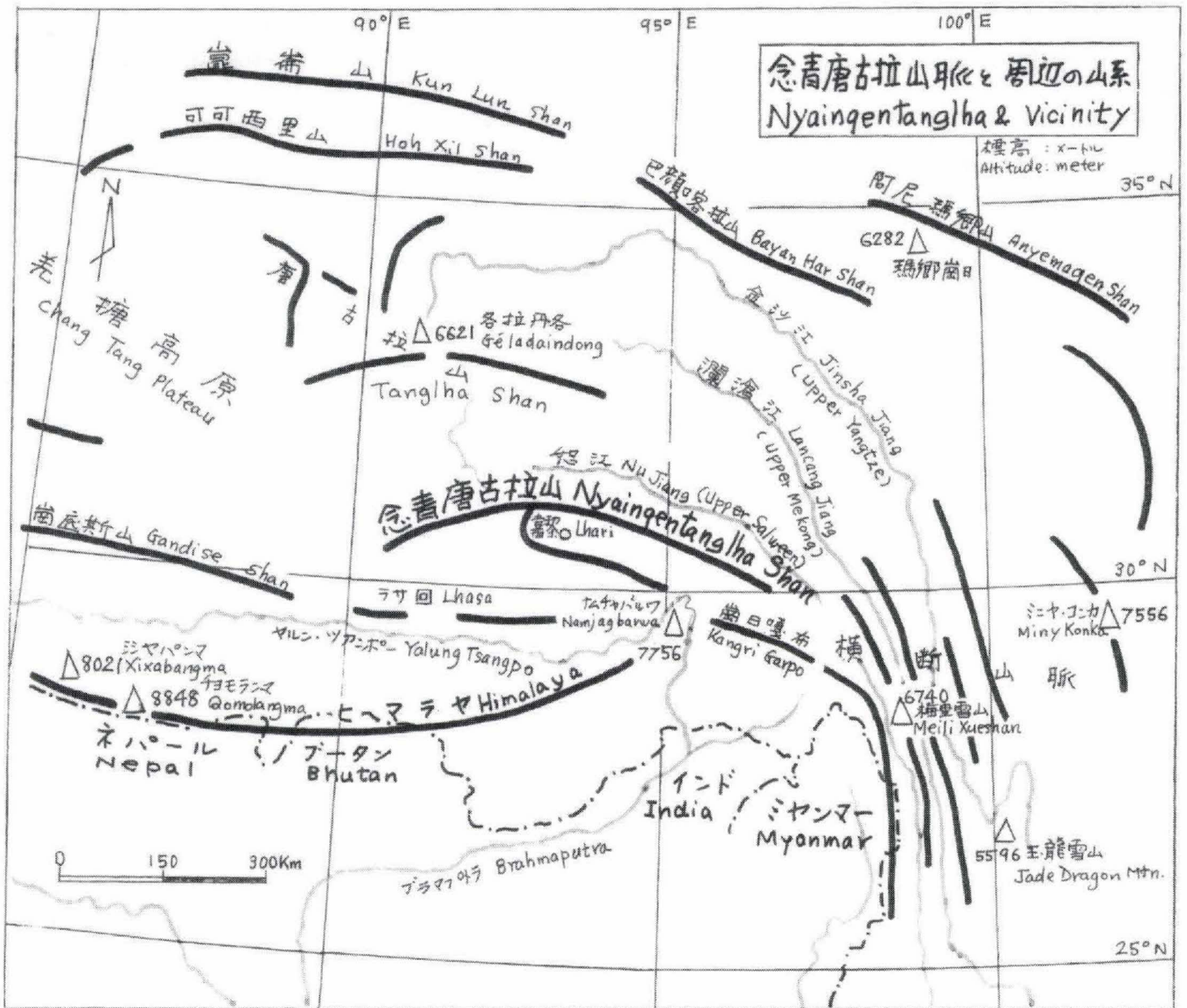
To The Alps of Tibet

Quest for the Veiled Mountains in
Nyainqentanglha East — Oct. - Nov. 2001

『深い浸食の国』(山と溪谷社、2000年)の冒頭で私は七〇年前のJ・ロックの言葉を引用した。

「今日では、地図の上ではもはや何も秘密は存在しない」と、こんな言葉を鸚鵡のように繰り返している不勉強な者たちがいる。しかし、誰がチベット全域、あるいは遙か僻遠の地、中国西部・チベット辺境に精通しているであろうか」

時代は大きく変わったが、21世紀に入っても殆ど探査されていない山域がある。ここに紹介する念青唐古拉山脈東部は中国に残された最大で最後のフィールドである。





山群の中で最も美しい秀峰 ジャジャチヨ 6447m

AAJ編集長のベックウイズ氏に写真を送ったところ「中村さん、「I am incredibly impressed.」探検的登山を志向する世界のクライマーの注意を再び惹きつけることを期待します」と返事がきた。今回は好天と幸運に恵まれ会心の旅であった。

晴れた日に四川省の成都からラサへ飛んだ人は、眼下に次々と現れる氷河と氷雪の秀

峰・峻峰に目を見張ったことだろう。壮観である。中国的な表現をすれば「氷河は無数の巨大な白龍が高山深谷を泳ぎまわるように、原生林、氷河、鋭峰のコントラストは感動的な一幅の絵画である」となるろう。

念青唐古拉山脈は北緯30°31度の間を、西端はチベットの聖湖、納木措の南の7000m峰に始まり、東はヤルン・ツアンポー大屈曲部の東の然烏まで弧を描いて連なる全長750kmの長大な山脈である。山系としては、中間よりやや西寄りの嘉黎を境にして二つに区分される。

1. 西部は山域全体が高く青藏高原を形成している。7000m以上の高峰4座が西端に集中する。山脈と同名の最高峰、念青唐古拉山(7162m)は1986年に東北大隊により初登頂されている。氷河は山頂付近に集まり、雪線は5700mと高い。

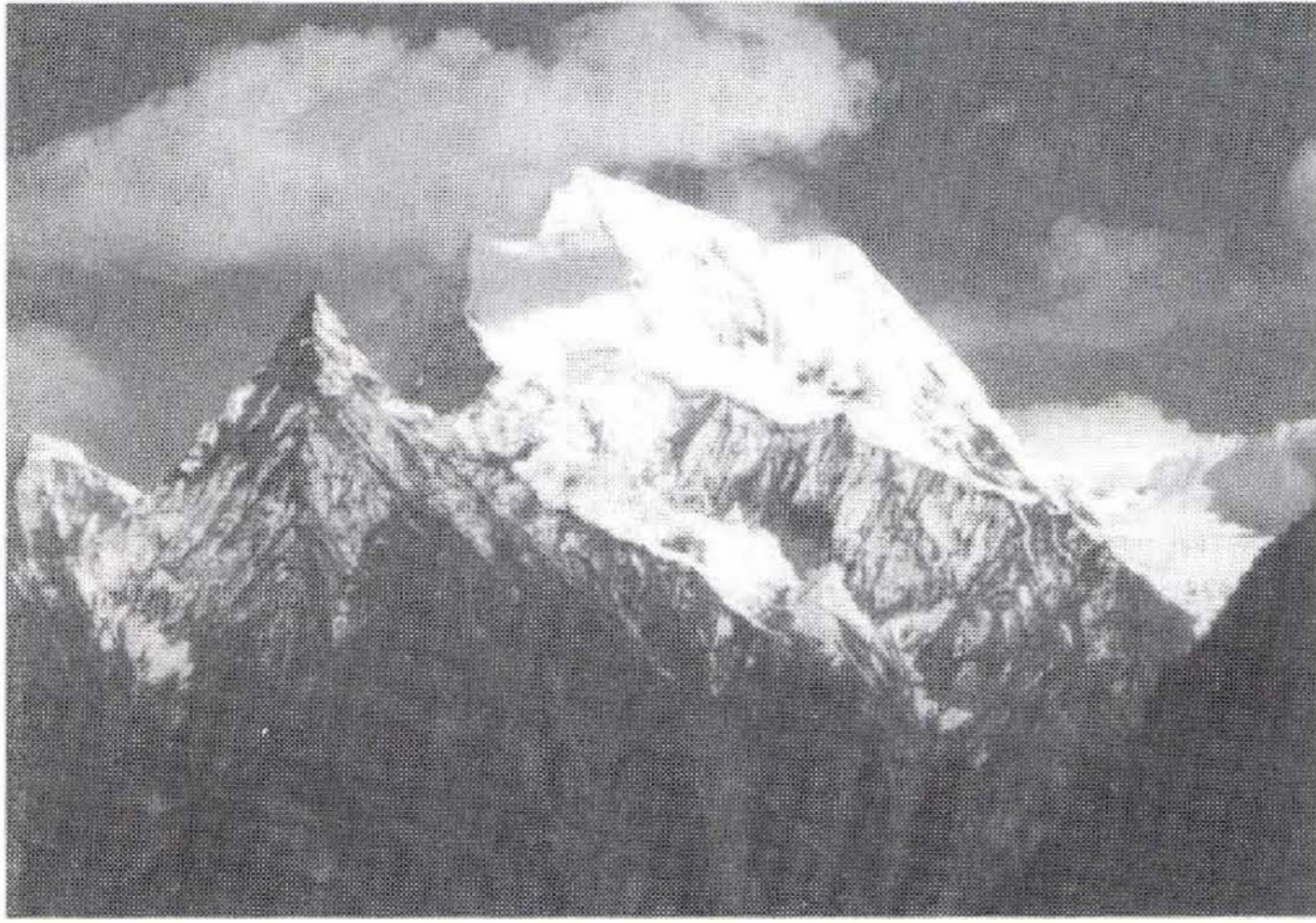
2. 東部は青藏高原の東南の周縁部で、ヤルン・ツアンポーの支流が縫目のように食いこみ峡谷をつくり、湿潤な気候は降雪をもたらす氷河を育て、秀麗な雪峰を造形し、美しい針葉樹林を涵養している。東部の主脈は最高峰の色浦崗日(6956m、英国ポニントン隊が1996年7・8月に3回挑戦)の山塊から東へ連なる。水系的には北側の怒江上



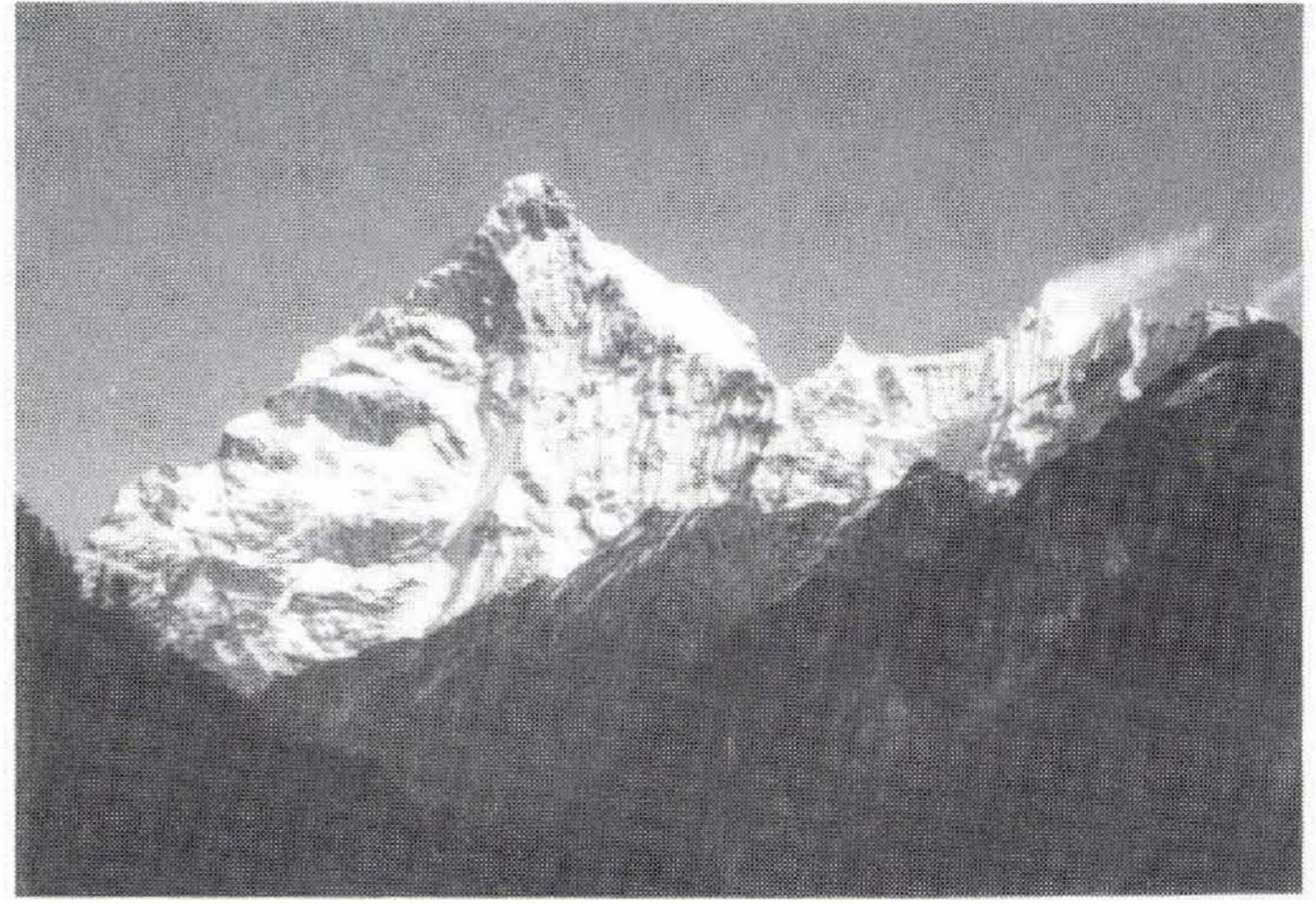
海拔5000mにあるチベット族の村落で

流部と南側のヤルン・ツアンポーの二つの支流、易貢蔵布と帕隆蔵布との分水嶺を形成する。数えきれないほどの未踏の6000m峰が存在する。多くの大きな氷河が発達している。恰青氷河は全長35km、峡谷型氷河としてはチベット最大である。

3. 主脈の南、嘉黎の阿扎措付近から通麦まで、易貢蔵布の南側に連なる山群も一括して念青唐古拉に含める。今回の踏査の対象であ



5948m 無名峰 ツオンパの東



6620m 無名峰 八松措の東



景勝池、八松措(沽)

心の町、八一鎮バイイーチンで非開放地区への入域手続きをする。

10月22日 快晴、景勝地、八松措のほとりのキャラバン出发点、錯高郷結巴村ツォンゴに入る。73戸446人のチベット族の村である。湖岸から北東に3つの鋭峰が望まれる。

10月24日 第一段階、八松措の北の谷へのトレッキングに出発。馬8頭、馬方5人の編成。年寄りの日本人3人にはおとなしい馬をあてがってもらう。主谷は北から西に延びている。その源頭の6500m以上のピーク



春日井さん(左)と中村(右)

が集まっている氷河の末端を目指したが、悪路に阻まれ到達できなかつた。が、途中の往復5日間のキャラバンは素晴らしかつた。開けた谷の両側に次々に現れる氷雪の6000m峰に日々感動した。チベット族の馬方達との交流も心温まるものだった。ただ、そのうちの一人が、夜中にお経を唱えるのには閉口したが。

10月29日 結巴ジュバを発つて第2段階の起点になる朱熱ジュネに車で移動する。分水嶺の5200mの峠を越えて嘉黎に至る昔の交易路は今

でも使われ、ヤクが物資の輸送をしている。1924年にキングドン・ウオードが通っている。ルート沿いに望見する未踏のピークが素晴らしい。

10月31日 朱熱からキャラバンの出発点、ブンカまで材木運搬用の大型トラックで行く。極端な悪路で、後半は道無き道を強引に進む。チベット族の家に泊まり馬の手配をする。この地方には旅人を毒殺する風習があったというので緊張する。

11月2日 馬8頭、馬方5人で出発、旅のハイライトである。北西に谷を上る。ヤクの隊商や五体投地の巡礼とすれ違う。振り返ると山群の最高峰ネナン（6870m）が初めて姿を見せる。キャンプも快適である。

11月4日、初めて雪となる。幸い、峠ツェン・ラに着く頃には晴れてきた。後は下り一方の道である。

11月5日、透明度の高い阿扎措のほとりを通過して目的地の嘉黎に無事到着した。夜は四川料理で馬方たちの労をねぎらった。翌日は北側の峠の途中まで登り、秀峰ジャジャチヨ（6447m）を遠望する。

11月8日、ラサに帰着、真に充実した辺境の山旅であった。

ミニヤコンカ近況

2002年2月12日～16日

金子 晴彦（昭46年）

北京から南西方向へ2時間、そろそろ下降態勢に入った四川航空エアバス321の機上からみわたす成都盆地は一面厚い雲に覆われている。ところがその薄汚れた灰色の雲のただ中に、純白のピラミッドがぽつんと小さく突き出ている。ほかには何も見えない。

四川省、ミニヤ地方の白い（カ）氷雪（コン）の山、ミニヤコンカ山7556mだ。

機は程無く、揺れながら分厚い雲の中に突っ込み、薄暗い成都空港に着陸する。昨年秋改装された、まるで関西空港の様な超近代的なターミナルに降り立つ。

2002年の2月、旧正月の休暇に僕らはミニヤコンカを訪れた。3年前、香港にいた当時、週末には香港の山、長期休暇にはヒマラヤの周辺へと必ず出かけた。香港の後の勤務地、関西ではそうした動きはしにくかった。日本という閉鎖的な世界のオーラのせいかも

しれなかった。しかし、昨年10月、北京転勤となり再びその熱が戻った。香港当時の仲間
に声をかけると香港、日本から6名が集まった。またぞろヒマラヤめぐりシリーズの再開だ。持つべきものは仲間。するべきことは実動。様々な面倒には目をつぶり僕らは出発した。

さて何故ミニヤコンカなのか。僕らは既に中村先輩の手のひらの上にある。あの魅力的な2冊の本は宝石箱のようなものだ。どこでもいい、ページを繰りさえすれば今まで見たこともない、まさに処女峰がぞろぞろとこぼれ出す。香港にいる時代に既に虜となり、チベットと雲南の玉龍雪山、梅里雪山に出かけた。しかし、深い侵食の国を実感するにはまだ不十分だった。となると次は当然四川だ。成都の盆地が終わり、横断山脈が始まる
ところ、そこを見ないわけにはゆかない。そこでまずは四姑娘が候補にのぼった。手近の旅行会社に手配を頼んだ。すると、2月は雪が深くて行けないが、代わりにミニヤコンカはどうだと言ってきた。着任後いまだ3カ月、素人としては反論の仕様がな
い。直ちに了承した。

それから記録を集め始めた。真剣に読まな
いままに引越し荷物の中に入れておいた山本
先輩翻訳のバードソルの初登頂本を読みふ

かった。何ということだ、今から70年以上も前、1932年に上海から船で揚子江を遡り、ユーロシンで測量をして、この山が想像されていた9000mではないことを確認した後、10月末に初登頂をやつてのけてしまうという意気軒昂。探検と冒険の本来の味わいがぎつしりと詰まった内容に唾然とした。

そして次は20年前の、市川山岳会の松田さんの生還報告だ。その本からはミニヤコンカの博物的な情報は一切得られない。いかにして生きる意思を持ちつづけたのかというその一点が異常ともいえる記憶力で再現されている。それを緻密にたどることでこの山にまつわる亡霊たちの姿(20名といわれる)が見えた気がした。簡単な下山のルート図があとで意味を持つことにもなる。

加えて、アルパインツアーの仲間から最新情報が届いた。これはいささか趣が違った。「えっ?これって中国?」と題して、この地域の開発の現況が語られている。昨年5月にロープウェイが完成したのを機に2年ぶりに訪れた報告だ。これまでのヒマラヤ巡りで時として感じた「秘境は今や大観光地」という経験をふと思ひ出させた。1月末には、たった今帰った友人からの報告もあった。何だかとても簡単な報告で、これまで集めた資料の中から湧き出していた秘境の香りはしなかった。

「あまり歩くところはない」の一言がリアルで大変気になった。

ともあれ、こうして未だ見ぬ地の情報を集め、想像をたくましくするうちに素晴らしい秘境のイメージが頭の中に浮かぶようになってた。

成都の空港の広大な駐車場で北京組2人を待っていたのはBMWに乗った旅行社の社長と美人のガイドだった。社長は僕らを待つ間、駐車場の真中の間歇噴水で遊んでいたのとこで、突然噴出する水や、風にあおられた水でびしょ濡れになっていた。空港高速道路を右に左にカーブしてわずか20分ほどで街中の5つ星、ホリデイ・インに着いてしまう。その間美人のガイドは社長の濡れた髪を後ろからタオルで拭いてあげていた。山姿のぼくらはきらびやかなロビーには不似合いだった。外へ出てみれば、旧正月元旦ということ成都の街中にはおのぼりさんが多く、わずか1週間前にオープンした王府仁なる歩行者天国繁華街はまともには歩けないほどの混雑ぶりだった。ジャスコも盛況だった。5年前に会社のマーケティング調査で来た時からしてもあまりの変化だった。僕は本屋に出かけてミニヤコンカ周辺の地図を探した。観光パンフ程度のもの以外は何もなかった。

夕方ホテルに戻ると香港組の1人が到着したところだった。一足先に成都に入り、あたりをうろついて来たという。

「どこに行ったの?」聞いて驚いた。「2泊3日で四姑娘を巡ってきた」という。

「エッ?雪があつたんじゃない?」

「いやあーいい天気で4500mの峠から全部見えましたよ。次は大姑娘に登りましたよ」と平然と言う。旅行社の雪が深くて行けないとの情報を信じて諦めていたその場所に彼は呆気なく出かけて帰ってきたのだ。

僕ら北京組は先ずは社長とガイドがいちゃつく旅行社を呪い、そして色めきたった。相棒は3月には日本帰国が決まっている。無類の写真好きで5年の駐在期間中に中国のあつちこつちに出かけて、この4年間卓上カレンダーを作つて来た。今回も出来る限り沢山の山を撮りたくて仕方がない。彼は早速質問を始めた。何時間で峠に行けるのか?そこからのどの位見えるのか。峠の先のルーリー村まで下りる必要があるのか。情報を得てしばらく考えた挙句、彼は「ミニヤコンカから帰ってから一日滞在をのばして日帰りで行かせる」と宣言した。僕はいささか慌てた。北京での毎日の運航に責任を持つ身でそう簡単に休みを延ばせるわけではない。ではガイドに行けるかどうか聞いてみよう。

そのガイドの名を聞いて驚いた。中村先輩が懇意にされている四川探検旅遊公司の張少宏さんだった。13808185896に電話した。

「うん、どうにか一日で行けますよ！」

流暢な日本語での返事だった。相棒はすっかりその気になった。僕は北京の事務所を思いながら迷った。帰りの便の予約変更ができるかどうか分からないという理屈で後刻確認すると言って電話を切った。目の前に2つの山が揃った。そして結局は旅程を1日延ばして四姑娘にも出かけることにした。夜半に残りの香港組みが合流しそのうち1人も合流を宣言した。中村先輩、張さん……赤い糸はしっかりとながっているようだ。

翌朝9時前、ガイド、運転手をいれて総勢8人は15人乗りのマイクロバスで出発。成都盆地はすっかり霧にふたがれてほとんど視界がきかない。雅安(ヤーアン)まで120キロほどの立派な高速道路が完成し雨雲に煙る茶畑の中を途中休憩も入れて2時間ほど着いてしまう。さらに40キロほど進んで川沿いの街、天全(ティエンチェン)。冷たい雨が降っている。11時半とやや早いが昼食にする。観光バス用の大型食堂で観光客があふれかえっている。これだけの人がどこに行くのか？まさかミニヤコンカではあるまい(そうだった)。

早くも田舎の風情で、食べたこともない野菜の炒めものが続出。いわゆる四川料理の辛味はない。

そこから川沿いの道になる。上海からラサへと続く318号線がいよいよ横断山脈の東端の山陵へと登り始めたのだ。途中検問所があり、それから奥への通行には許可が必要になっていくが、トラック、バスと車の往来は激しい。天全から70キロ、ほぼ1時間半で深い山の中の道となり山肌には斑に残雪が見え始める。登りつめた所に突然巨大なトンネルの入り口が現れる。かつての難所、二郎山の中腹をくりぬいた二郎山トンネルだ。あたりには霧が舞い、雨が降り、工事中の広場はいかにも殺風景で、これでは山なんか見えないなどいささか暗い気分になる。入り口の上のトンネルの名牌に2000年12月28日完成と記されている。完成してまだ1年ということだ。

4キロのトンネルを抜けた途端まぶしいほどの陽光が射し込んできて一行は思わず手を叩いた。湿潤な東側とは全く違う、乾燥し、樹木の少ないチベットの景観が広がる。これこそは横断山脈の谷ごとの景観の違いの真髓だ。南に向いたゆるやかな斜面の途中には、わずかな畑に囲まれた集落が点在している。

一見チベット風でいてしかし漢族の村。バスの中は一気に暖かくなる。二郎山の山頂は雲に隠れて見えない。その向こうにはまだ暗い雲があふれている。

道は高みを水平にくねりながら進む。そして最後の角を曲がると真下に大渡河の深く大きな谷が広がる。段丘の畑に咲き乱れる黄色の菜の花が見事だ。上流を眺めれば春霞のはるか上に雪と岩のラモ・シェ(6070m)の端正なピラミッドが宙に浮かんで見える。対岸の山のおかげでミニヤコンカ方面は見えない。中村先輩の本の口絵で幾度となく眺めたまさにその景色だ。すぐ真下にはルーティーの村があるはずだが急な坂の上なので見えない。九十九折を繰り返しながら川へ向かって下ってゆく。

下りきったところでT字路となり、ぼくらは318号と分かれて大渡河沿いに南に向かう。まだ旧正月だというのに暑いほどの日差しが降り注ぎ、菜の花はまばゆく輝いている。思いがけず明るい、深い侵食の国に僕らはやすやすと足を踏み入れてしまった。谷沿いを南へ40キロ、大渡河を立派な橋で渡って、しばらく今度は西へ向かう海螺溝ハイルゴウの下流の川沿いに上ってゆく。この河の源流こそがミニヤコンカの氷河だ。

出合いから20キロほどで前方に河を塞ぐ

ように盛り上がったモレーン台地が見え、その上に白いホテルが姿を見せる。まさかと思うがそこそはミニコンカの基地・磨西(モシ)だ。台地の上には旧市街Ⅱ老街を南北に貫く旧道と、真新しいホテル街を南北に貫く新道が平行して走っている。新道の南の外れには白亜の磨西飯店が堂々とした構えを見せ、その頭越しには遙か高みで雪と氷の斜面を逆光に輝かせる巨大な北岳の様な山が見える。バスは構わず登ってゆく。左手に朱色の壁のケバイホテルがある。右手を見れば畑の向こうに古い教会が見える。その隣の宣教師の館には毛沢東が長征の折に住んでいた。しかし古い世界はほとんど見えない。そしてその先にこれまた真新しい(2000年1月完成)僕らの宿舎4スターの氷川飯店。バスに乗ったまま車寄せに入るとチベット民族衣装風の制服を着たボーイがカートを持って迎えに出て来る。都会のホテルと何の変わりもない。ザックを背負った僕らは場違いで、スキンパンツルックのガイドの朱さんが似合いのロビーだ。到着は5時少し前。成都から7時間のバス旅だった。

本来今日の予定は到着後、二营地なるところにある温泉に入りに行く予定だった。それがどうも気が進まない。むしろこの「素晴らしい秘境」のイメージには全くそぐわない場

所を抜け出してその先の状況を掴みたい誘惑に駆られた。北京の同僚は何としても上で泊まりたいと言い出した。あとで分かるのだが中国駐在5年になる彼はよくいえば極めて積極的、悪くいえば中華的になっていた。そこで、ケーブルの駅があるという三营地までとにかくも出かけて様子を見ることにした。

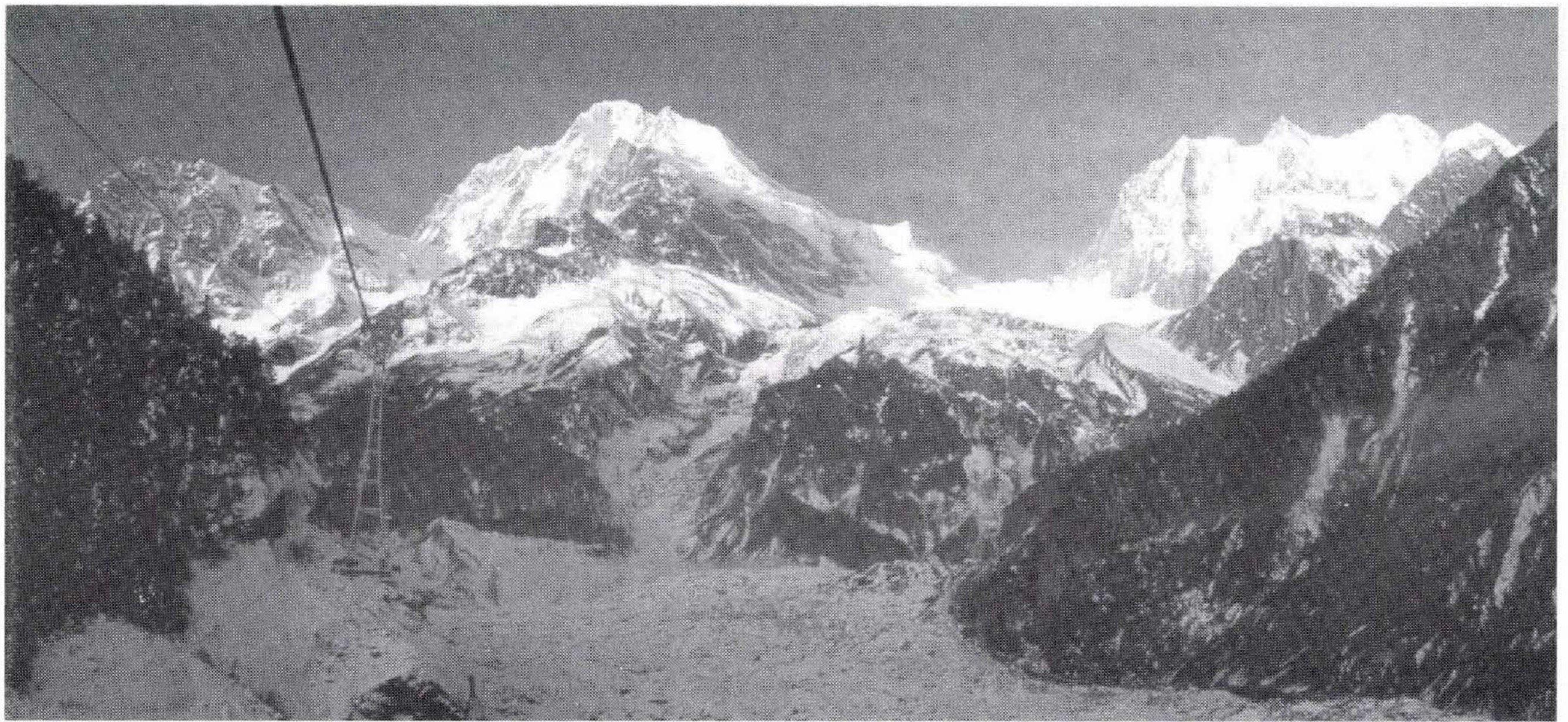
5時過ぎに出発。だいぶ西なのでまだまだ明るい。海螺溝氷川森林公園の専用バスにここから乗り換える。程なく大きな中華街風の門がある公園入り口になる。入場券1人160元を買い、登録をしようやく中に入る。こうした手続きはガイドがいると大変便利だ。それにしてもこの時間になってもまだまだ入場しようという人がいて、門の周辺は大騒ぎだ。

この公園は四川省コンカ山現代氷川有限公司(社長 陳慶礼)が2000年に整備したという。一般車を止めて専用車に乗り換えさせるなど先進国の公園のシステムを導入している、これまでの中国での観光開発からすれば大分様子が違う。最近、中国の様々な分野では一気に世界の最先端に飛びつくという現象が頻発している。携帯電話、ソーラーエネルギー、デジタルカメラ、そして観光開発。途中経過はないので大変効率が良い。日本は今この途中経過に完全に足を絡め取られてい

る。

磨西は1645m、第二营地は3200m。深い谷に落ちる急斜面に九十九折の道が続き、所々にオーバーヒートしたバスが止まって乗客がその周りでゲンナリしている。大型バスに代わる専用バスは少なく、公園外のバスが急坂を念頭にもおらずにそのまま登って来てしまった結果らしい。あたりは深い森になるが道の周辺には立ち枯れた樹木が目立ち、南アルプススーパー林道を思い出す。バスの排気ガス、太陽の直射が容赦なく森を襲う。坂の初めに第一营地、30分ほどで第二营地、さらに30分ほどで樹林の底に雪が目立ち始め第三营地、終点となる。上高地への登りをもつと長く、急にしたような雰囲気だ。

終点には氷川飯店と同じ経営の金山飯店と、スイスのシャレー風の法螺溝賓館がある。そして樹木越しに西に金銀山(6410m)と三連峰(6468m)が見える。雪が凍って足場が悪いのだが、途端に誰もが林道をさらけに上へと歩き出し始める。あたりはすっかり雪に埋まって冷え込み、ようやくにして秘境の地へとやって来た思いが萌し始める。今の晴れの景色をしっかりと眺めておかなくては明日はどうなるか分からない。誰もがそんな風に思っているようで黙々と歩く。空気が薄いのか、風邪気味なのか息がやや苦しい。いく



ハイルーゴ氷河と金銀山／三連峰（金子晴彦撮影）

つめかの大きな角を回った正面に金銀山と三連峰が覆い被さるように姿を見せた。太陽がどンドン沈み山の端の向こう側に落ち、幾筋もの光線が空に向かって叫ぶ様に放射されていた。次々と小さな雲が湧き、光を受けて虹色に染まった。道端に突っ立って僕らは一日の終わりの光の饗宴を眺めた。上の方のケールの駅までを往復する籠かきの連中がその横を忙しそうに上下していた。

20分ほどもそうして眺めたり写真を撮ったりして金山飯店に戻った。屋上の眺めが良さそうだったのでロビーに入って上に登っていかと聞くとOKだった。先客もいて暮れいく金山を眺めた。背後にはアイガー北壁を思わせる堂々たる山があるが4500m程度ではここでは単なる隆起に過ぎないらしい。

それにしてもここまで来る限りは、この第三營地に泊まるのが鉄則だろう。しかし、我々が旅行社は一流のホテルにこだわり過ぎてこの地のホテルの予約はしなかった。旧正月の休みとなつては今や満室で、会議室にまで布団を広げていた。北京の相棒はまたまた憤慨した。

その夜、磨西に戻ったのは7時、長い一日だった。さて夕食と期待したがバイキングの中身はローカル料理でもなくはたまた都会料理でもない中途半端なもので極めて不評だっ

た。中国の旅でまずいものにお目にかかったことは滅多にない僕としては自前食の準備までは考えてはいなかったが、ここではどうしても自衛が必要だと思われた。唯一評判だったのはゴロンとそのまま出た、ふかしたさつまいもだった。またまた旅行社に不満が向けられた。

翌朝はモルゲンルートが見たいということのでゲートが開く6時半を目指して真っ暗な中を出発した。しかし、生暖かい朝で、真っ暗な空には星の一つも見えない。やれやれ昨日の日没で晴天は終わりかと落胆しつつバスに乗り込む。弁当は卵2つにいいかげんなパンが3つ。これも4スターとはとても思えない。どうせこんなことなら2スターに泊まって近所の料理屋で飯を食べればいいのだが旅行社に頼んでしまうとそんな自由は利かない。

第三營地到着7時半。やや暗いものの昨日来ていたおかげでまごつかない。しかもここまで来ると僕らの位置は雲の上になり、青空の予感が広がる。金山飯店で土踏まずにつけるミニアイゼンを借りて昨夕同様、金銀山がより良く見えるところへと足を急がせる。ちよつとしたアイゼンが大変歩きやすい。程なくまさにモルゲンルートに染まりつつある峰々が樹林の上に姿を見せた。どっしりした台形の上に立派なヒマラヤ巒をもった頂上

ドームを乗せた金銀山。鋭い峰を連ねる三連峰。それが金色から朱色、ピンク色、黄色、青へとわずかの間に色を変えてゆく。久しぶりの大きな山だ。

北京の相棒は6×4.5カメラの店を広げる。ほかの連中は先に行ってしまう。ぼくも35ミリでさっさと撮影して彼を置いて行く。とても思いやりのない仲間だが写真を撮りたい人間と登りたい人間では矢張り行動は異なる。ぼくはその両方をカバー出来るように撮影機材は極端に切り詰めている。三脚が望ましいがレンズ位置の調整に思わぬ時間を取られるので一脚だ。粒子からすればASA50の35ミリポジが不可欠なので10分の1秒まで何とかブレずに撮る工夫をする。レンズも28〜70ミリのズーム一本だ。いささか重いが頼りになる。

林道をくねくね歩いて20分ほどでケーブルの駅に出る。林が開かれてモダンな駅舎が作られている。オーストリアのドッペルマイヤー社の設計施工により2001年完成の6人乗りゴンドラだ。距離は3・4キロ、高低差は約200m。広大な海螺溝氷河を2キロにわたって横切るところがこのゴンドラの醍醐味だ。これだけ荒々しい自然の只中を行くケーブルはおそらく世界でも珍しいだろう。営業開始は8時半。

3人づつに分かれてゆったり乗ってしばらく、針葉樹林の上を越えるとケーブルは突然まだ太陽の光が届かず暗い陰の中の海螺溝（ハイルーゴ）氷河の上に出た。支柱のない2・5キロにわたる空中浮遊が始まる。程なく音がすっかり消えた。ゴンドラの中で僕ら3人はつんぼになった様な思いで回りの景色に見とれた。

真下を、縞模様には波打つ幅1・5キロの氷河がくねるようにして流れ、正面には巨大な北岳を思わせる金銀山（6410m）が朝日を浴びてまばゆく輝く。近づくほどに晴れわたった青空へとぐんぐん伸び上がり、右手には氷河に削られて切り立った急峻な岩尾根が現れる。報告の中の地図によれば窓から正面に見えるそこそは20年前、市川山岳会の松田氏が生へ向けての死闘を続けたその場所だ。とても登れそうな場所ではない。さらに進むと金銀山の右手に鋭いピークを連ねた三連峰（6468m）が現れる。手前の岩尾根との間には氷河へと下るアイスフォールの末端が見え始める。主峰ミニヤコンカ（7556m）から下って来る氷河だ。

ゴンドラの小さな窓から首とカメラを出し、夢中になって見事な姿を撮影する。ケーブルカーの滑らかな動きのせいでそうして撮影してもぶれる心配がない。さすがドッペルマイ

ヤーだ。

氷河を渡り終えると台地が現れそこが終着駅、ミニヤコンカの展望台3300mだ。まだ9時と早いのに展望台ではカメラマンが機材を整えて撮影を始めるような様子が見える。ぼくもすっきり興奮してケーブルを降りると展望台に急ぐ。そこは氷河で削られた断崖の上であって30mほど下に氷河が流れ、正面には幅、高さともに1・1キロのアイスフォールが圧倒的に雪崩れかかっている。そしてその源頭の上に真っ白なミニヤコンカのピークが朝日に輝いている。下を眺めれば氷河の末端が厚い雲の中に隠れ、豆粒の様なゴンドラがその雲の中から次々に登ってきている。

これが秘境ミニヤコンカの今日の姿だ。イスのゴルナグラート氷河の展望台と変わるころはない。見渡す山々が6000mを超えるのだからこちらの方がよほど壮大といえるかもしれない。そこへハイヒールでやってこれる。下の氷河へは踏みあとが下っていたが足場は悪そうだ。ふと気がつくとき先ほどカメランかと思った人々は現地のチベット人で、おそらくそこで夜を過ごして、小さなブリキの炭コンロで羊の串焼きを焼き始めた。もう何度も焼いたらしい肉は縮こまって硬そうでもとても食べる気はおきないが香りは香ば

しい。1本1元とか。

30分ほどもあたりを眺めていたが何となく物足りなく、ケーブル駅の裏山の上にあるチベット風タルチョをめがけて登ることにした。最初こそコンクリートの歩道があったが程なく雪に埋まり、足がズボズボと雪に埋まるようになった。ゴアのオーバーズボンをはいただけでスパッツも何も無い軽装なので靴の中に雪が入りそれが溶けいささか気持ちが悪いくらい。それでも実に久しぶりの雪中登行だ。浅い窪地を抜け、小さな突起を登りいつのまにかかなり真剣になっている。酸素が少ないのでさすがにしんどい。肺がヒューヒューと鳴り、赤くオーバーヒートしつつあるのが分かる。上を見上げれば風に翻るタルチョは次第に遠ざかる様でまだまだ遠い。下を見下ろすと赤と青に塗り分けられた三角形のケーブルの駅が雪原の中にポツンと小さい。

赤いヤッケが見える。残った仲間も登り始めたようだ。こうして勝手に先に動いて仲間がついて来る。誰も来なかつたらどうするんだとは思わがいつでもこうなる。アンナプルナ回廊でマチャプチャリを眺めに雪の斜面を登った折もそうだった。ゼーゼー息をはきながら嬉しくなる。それにしてもピッチが上がりやすい。斜面は急になり滑りやすく、ピッ

ケルが欲しい。カメラの一脚を杖代わりに使う。やたらに暑いので羽毛服を脱ぐ。全く準備もしないで登ったおかげでよれよれだ。

結局すぐそのつもりだった金銀山から下る支稜上のタルチョに着くのに1時間半もかかってしまった。3700m。反対側はもう一つの氷河へとすっぱりと切れ落ち、氷河とも雪原ともつかないゆるやかな谷が広がっている。そして右手にはいよいよ近くなった金銀山が見事なヒマラヤ巒に飾られた北壁をどうだという感じでそびやかしている。さらに右手には三連峰。いくつもの小さなアイスフォールが落ち、それがまとまって巨大な懸垂氷河になっている。

岩と雪の尾根の上に千切れ雲が湧き、風に吹かれて真っ青な空へと綿毛の様に伸びて消えてゆく。モレーンの下の氷河が溶けて上に乗っていた岩がガラガラと崩れ落ちる音があたりを響く。そうして岩尾根の上あたりを眺めていけば正にヒマラヤのベースキャンプの雰囲気伝わってくる。どうせここに来るならホテルなんかには泊まらずに、テントを担いでまっすぐここにやって来て、あちこち歩くのがいいかもしれない。しばらくして仲間が登って来た。皆大汗をかき、大口を開けて少ない酸素を求めて苦しんでいる。しかし、そうして一つの高みに登り着いたことでは

やく誰もがミニヤコンカに来たという思いを確認した。

30分ほどそこにいてから下った。踏み跡を外れると腰まで雪にもぐる。結局往復3時間もかかる登山になってしまった。12時半、駅で待っていたガイドと北京の仲間はすっかり待ちくたびれていた。すみません、ぼくらの山行きつていっつもこうして予定外がメインになってしまふんです。そうお詫びしたが、まさにこれが無くてはもの足りなかった。

展望台には人が増えた。誰でも気楽にここまで来れる。旅行好きの中国人の間ではこの情報は一気に広がるだろう。5年程前に世界遺産に指定された九賽溝はあつという間に一大観光地になり、今では年間100万人が訪れている。いささか遅れて日本人が入る頃にはそこはすっかり擦り切れた場所になっていかねない。13億の人口を持つ中国における秘境の運命だ。

びしょ濡れながらもぼくらは満足して下りのケーブルに乗った。金銀山が氷河の向こうに遠ざかりぼくらは下流の雲の中へと吸い込まれてゆく。全て天上は快晴だ。

磨西へバスで下る途中、二营地にある温泉に寄った。入場料60元。狭い谷間の奥に90度の温泉が湧き、谷の段丘を利用して30ばかり

の露天風呂を棚田の様にしつらえたものだ。上の湯船の方が温かく、次第にぬるくなってゆく。回りは雪に閉ざされているのに水着をつけた男女の観光客で温泉は満員だ。温泉は裸で入るものという日本の哲学で考える限りこうした賑わいはとても生まれない。水着という一種の約束事のおかげでこれだけの家族や仲間が同じ湯船で楽しめる。これもつい最近1999年12月に完成したという。ぼくも早速飛び込んで雪山の汗を流した。登山と温泉という理想のセットがこうして実現した。その夜のバイキングも決してうまくはなかったが、今日の成果に納得した仲間は満足げだった。翌朝は9時発。途中、盛りの菜の花畑を撮影したかったものの雲が多く黄色の鮮やかさが足りないということで二郎山のトンネル近くまで走ってしまう。そこで往きに見かけたゆるやかな南斜面に点在する村が気になる。

これまでのぼくらの海外遠征ではたいてい村人との交流というものがあつた。ブータンではチョルテンを徹夜で守る4人家族と夜を過ごしたし、チベットではヤクのパオの中に侵入した。今回は完璧な観光旅行ということに目的地ではそうしたチャンスはなかった。ならば途中でつくるしかない。

ぼくは適当な下り道のありそうなところで

バスを降り、あとから名前を知ることになる。団結村第三組への滑りやすいドロ道を下った。ここでも勝手に前に進んだ。仲間がついてくるのか、それは構わなかった。それがどうも自分らしい。

成都へ続く道は立派に出来たものの一步その道を外れればそこは全く昔のままの場所だった。だんだん畑の真中に回りを土塀で囲んだ3軒ほどの集落がある。かわら屋根だけが黒く、家の壁はあたりの土と同じ褐色だ。家の裏庭の小さな畑に生える野菜の緑がひどく鮮やかだ。大地をそのまま家にして出来た集落。上のほうから突然急坂を下って来る一行を察知して犬が吠え始めた。バスのドライバーはぼくらに向かって犬に気をつけると言った。猛犬かもしれない。村外れの広場に4人ほどの男がしゃがんでこちらを見上げているのが小さく見える。警戒の雰囲気はピリピリと伝わる。こちらは急坂に足をとられてきやあきやあ言いながらその雰囲気を見無視して下り続ける。正しいのかどうか知らないがどこでもそうだった。まっすぐ彼らに向かって進むこと、これが見知らぬ人へのアプローチでは最も効果的だ。

男のうちの一人がこちらに向かって登り始めた。斥候が出たか。村そのものはひっそりとして人影は見えない。犬は吠え続けている。

登って来たのは少年、これもあとで分かる李君だった。こちらをうかがい、すぐに視線をそらした。頬を赤く染めたかつての日本の東北の子供。カメラを構えて写真を撮ると、おどおどとためらう。「こんにちは！ 家に連れて行ってよ」そうお願いする。

下の連中とも合流した。これは15、16歳の青年達。村の名前は何てんだ。どっから来たのか。などなど話している内にまるで人影のなかったあっちこっちから人が出て来た。女が多い。皆正月のせいかしっかりセーターの上にジャケットを着ている。こんな場所だと訝るくらいに裕福な感じだ。下の家からも人が出て来る。どうだ皆の写真撮ってあげようということになる。それなら我家まで来なさい。下の方の家に行くことになる。

こうしてぼくらは村にまんまと入り込む。石壁の内側は広場になりその角には何と洗濯機があつて回っている。総勢15、16人が勢揃いする。王爺さん婆さんとその子供と孫達3家族。正月ということでもどっかから来て集まったのかと思つたが全員ここで一緒に暮らしているという。瀘定県冷蹟政団結村3組だ。中庭で全員を撮影しようとする爺さんが突然家の中に入り二郎山トンネルの工事の時に使つたという黄色のプラスチックのヘルメットを持って来てそれまでかぶっていた毛皮の

帽子の代わりに頭にかぶる。それが正装であるらしい。わざわざ来てくれたんだねえと婆さんが喜ぶ。昼飯を食べてゆけどもいう。突然の邪魔者への思いがけず温かい歓迎にぼくもすっきり気持ちよくなる。ミニヤコンカで松田さんが遭難した折、磨西の人々の献身的な救助活動があった。その一端をぼくらは団結村で垣間見ることが出来た。1時間ほども過ごしてぼくらは成都へ向かった。

依然として厚いかすみに覆われた成都へは5時到着。早速四姑娘への準備のために張さんに連絡する。するとここ1週間天気が良いかったんですが今日から雲が出始めて峠に行っても見えない可能性がある。今ルーティーの仲間が峠まで出かけて調査しているとの返事だった。確かに帰りの途中ではだいぶ雨が降っていた。これは駄目か？ ぼくはいささか安心した。疲れていたし、北京への帰着を遅らせるのはためらわれた。それでも機会を失うのも気になった。夕食の後再確認した。矢張り駄目だ。せっかく行っても見えない。北京の相棒はがっくり肩を落とした。3月末に日本へ帰ればもうしばらくチャンスはないだろう。

こうしてミニヤコンカの旅は終わった。出

かける前に懸念した今や観光地という予想はまさにそのとおりだった。開発、結構、とても便利だ。しかし、しかし、矢張りどこか自分の力でなぞれる場所というものは欲しい。子供の頃の世界はどこもかしこも探検、冒険の場所だった。なぜなら出会うもの全てには未だ既存の意味はなく、自分でなぞって意味を確認するしかないからだ。そうして出来る馴染みの場所こそが故郷になる。観光という既存の意味で出来上がった場所で故郷を見つめるのはなかなか難しい。ちよつとした工夫が必要だ。それを再びぼくらは実感した。

翌日、朝早い飛行機で北京へ向かった。一面の雲を抜けるとそこは青空で何とミニヤコンカと四姑娘の輝くようなピラミッドが眺められた。雲の高さは3200m、峠は4500m。敢えて出かけていけば眺められたかもしれない。しかし、いいだろう。たった一日で往復して眺めるようなことは止めよう。いざれ7月、お花畑の花盛りの頃に大姑娘を登りに出かけてみよう。稲城なる場所にある別のコンカ山の情報も手に入れた。中国の秘境との付き合いは始まったばかりだ。

三スラ

宗像 充(平12年)

昨年松下順吉さんが亡くなったという知らせがあつて、針葉樹会報にも幾つかの追悼文があつたと思う。ずっと前に卒業した山岳部の先輩方とはそれほど面識があるわけでもないのだけど、松下さんには幾つか思い出すことがある。ぼくが一年のころの月見の宴で、自己紹介ということになり、そのころもう70歳は過ぎてたはずの松下さんは、戦争のときの登山の苦労話をしていたが、なにより驚いたのは、どの山だか忘れたが、山スキーに行つて板を忘れてきたからまた取りに行かなくてはと、つい最近の山の話をしてくれたことだ。

ぼくは失礼だとは思つたが、横に座っているこのおじいちゃんがまだ山に登っているなどとは思ひもしなかった。半年ほど山岳部で過ごしたばかりのぼくにとって、そんな年をとった先の自分の山登りのことなんか想像もつかないことで、今もそのときの話は印象深

く残っている。その後98年にブータンに行つた時に報告書を送ったが、礼状をいただき、そのときもまた数年前の松下さんの話を思い出してうれしかった。昨年亡くなったと知り、また松下さんの話を思い出し、このときはとても残念だった。

この三月に一人で谷川岳一の倉沢の三スラを登ってきた。日本の山登りでクライミングという分野は、今は必ずしも主流とはいえないのかもしれないが、そのぶんというか、だからこそテクニクや道具は発達したし、情報も豊富で、スタイルも厳しくなった。だから昔と違って三スラもそれほど構えるほどの対象ではない。どちらかというと冬壁を「ちゃんと」登ろうとする人にとっては登竜门的なラインだろう。今回一人で行ったのも、このルートは、最近では時間短縮のために一人で登るほうがよりリスクが低いという認識が、冬壁クライマーの通説になっていくからである。とはいえ、やっぱり一人で行くのはそれなりに緊張はする。落ちなければ技術的にはそれほど高度ではないとはいえ、落ちればまあ死ぬ。前の日出発するときには吹雪になり、一日駐車場の上でやり過ぎたから、詰めめのAルンゼの雪崩も気になる。この日が気象条件では狙い目だったとはいえ、新月だから夜

間登攀にはベストの条件でもない。1時過ぎには登山指導センターを出たが、雪はそれなりに安定しているが真っ暗で何も見えず、ときどきライトを消してぼやつと浮かびあがる山肌を確認しないとラインも取れない。

ルートそのものはそれほど難しくはなかった。雪壁登りに所々ダブルアックス（昔でいうピオレトラクション）が混じり、一カ所2mほどの垂壁になるだけだ。後で聞けば、谷川に通いなれたクライマーにとっては、冷え込みも激しくなく、しまり具合はいまいちだったから、一カ所バシッと音がして、さすがにそのときは緊張した。ドーム下の草付きもトラバースもよくはなかったが、技術的には問題なかった。

一番緊張したのは、初めて懸垂下降のためにロープを出し、下りたつてAルンゼを詰めるときだった。下降点にはギターくらいの大さのカラビナのレリーフがあつて、Aルンゼで遭難した人を追悼していた。そういえば吉尾弘が死んだのもこの辺りだった。年とつて山で死ぬってどういうことかなあとは思つたが、なぜか不自然に垂れ下がってる残置ロープにいい気分はしない。

Aルンゼを歩くときはパシ、ピシと音がして、バスツといって落ちる体といっしょにもうだめだと思つたけど、シュルンドに落ちた

だけですんだ。アックスが一本行方不明になったが、身代わりと思えば惜しくはない。くるぶしより少しもぐるぐらいのAルンゼをむちゃくちゃ慎重に足を出して登って稜線に上がったときは、ほんとに身も心も解放されて稜線から立小便をした。10時に指導センターに帰る。

最近いっしょによく登る明学OBの同期は、社会人山岳会で国内の登攀では前向きなクライマーの集まるYCCに学生の頃から所属している。そいつは絶対山岳部のOB会には出ないという。あんなところに行っても山の話にならないからつまらないというのだ。結果、そういう性質のOB会は、学生に期待し過ぎで、「最近の若者は……」とか言つたりもするんだろう。そんなことを言う人は、自分が若い頃そう言われたことの腹いせで今言ってるんじゃないかと思つたりもするけど、一橋山岳部のOBでいいところがあるとするなら、そういうことはあまり言う人が少ないことかなあと思つたりもする。

ぼくが前出た針葉樹会の総会も新年会もかろうじて山の話は成立する。どっちかというと、若いOBは山に登ってないのか、それ以前に人数が少ないのか、そういう場で山の話をするのが年配のOBに比べて多いという

わけでもない。ぼく自身が最近そういう場に出ないのは単に金がないからにすぎないけど、別に行くのが嫌いなわけでもない。それぞれの年代でそれぞれのペースで山に登っている人の話を聞くことはそんなないわけだから、まあたまにそういうところに行くのもそれなりに楽しい。とはいえ、今のところは体力もあるし、時間もあるから、クライミングに実際に出かけ、今意欲的にクライミングに取り組んでいる人が集まる場に顔を出すことが自分にとってはより楽しい。

とここまで書いて、だから針葉樹会がどうだとかいう話にはならない。ただ、今のところぼくは70過ぎてもスキーに出かけていた松下さんがいいなあと実際思っているし、三スラで怖い思いをしているときには、吉尾弘

会員便り

石和田 四郎 (昭31年)

3月19日岳友佐藤博君(へーちゃん)の娘夫妻経営のホテル(ホテル陸中海岸、岩手県陸中山田所在)に1泊、彼の霊前でお参りして来た。彼の一人娘恵理子さんは東京の理系大学を卒業後名古屋の機械メーカーに勤務、同郷のやはり理系の人と結婚し、後を継ぐか

みたいにあの年でクライミングでリードして死ぬのはいやだなあという思いもある。いつになったらすっかりとした考えで山に登れるようになるのかなあと思ってもするけど、そんなことがわかったら山登りなんかつまんなくなるだろうという言い訳を作りつつ、やめる理由がないからというだけでまた山に行くことが多い。それでどっちの自分も否定する気もないから、今のところ思いつきで山に登るのだ。ぼくにとっては山はいつも副業だから、そういう登りかたでいいのだと思う。

今日、国立の高層マンションの前で反対運動の出店で座っているときに、たまたま国立に来ていた佐藤さんに声を掛けられたので書いてみました。
4月20日

どうか思案の末、彼の密かな期待にそって、約10年前に旦那とともに帰郷、目下懸命にホテルの経営に奮戦中。以下概要を報告します。

1. 佐藤君は皮膚ガンとの闘病1年の後、平成11年4月5日逝去。享年67歳。その2年前に奥さんに先立たれている。

2. 彼は一橋卒業後早稲田に学士入学、建

築を勉強。帰郷後暫く教師。昭和38年父親発案になる「ヘルスセンター」風のものをスタート、これがホテルの原型。それも商売というより、自分の設計、建築の夢を実現して見たいというものだったようだ。後年彼自身「最もふさわしくないものを始めてしまった」と言っていた由。宣なるかな。

3. ホテルは32室、10年前増築した10室以外は大分ガタが来て補修費増あり、経営は楽ではなさそう。しかし、彼らしく、堅実経営で借金するのが大嫌いだったそうでこれが今に役立っていると見られる。波静かな山田湾を眼下に、ロケーションは抜群だが：

4. 佐藤君はもちろん地域の名士でそれなりの活動を余儀なくされたが、いわゆる「宿屋の主」然とホテルの事務机にデンと座っていることを好んだという。

5. お嬢さんによれば、「こんなに早くとは予想もしなかった」ので、父から聞くべき機会を失ってしまったが、「何時もミニピッケルを身近に置いており、また片付けものをしていたら、大事にしまつてあつたマークユリーのボタンが出て来たりして、やはり一橋の人だったのだな」との思いを深くしたとのこと。

6. 1年の闘病生活については縷々聞いたが、兎に角「まづ右わき腹にぐりぐりが現れ、

それが実は皮膚ガンでその元凶はアキレス腱付近のホクローメラノーマであることが判明するまで、かなりの期間がかり、それがリンパ系を急速に伝播して身体中に広がってしまったという。皮膚ガンなのに切除が困難だった由」ホクロは要注意。

7. 当方からは、昭和28年7月16日から31日までの「劔合宿、槍ヶ岳縦走」の佐藤君がよく写っている写真を4枚拡大複製、縦走のルート図、山讃譜、一橋山男の歌などを一冊のファイルにして持参、彼の若かりし頃の様子を伝えた。また、事前に「ゲッコウの曲」を送り、これのルーツ、現状如何にとアクセスしたが「杳として解からず、今後の楽しみ」となる。佐藤君、娘さん、旦那さん、みんな盛岡中学、高校卒なので、級友にいろいろ当って見たとの事であったが…。

さて、小生勝手に一人（女房と一緒に）先行で陸中海岸を訪れたが、オーション会として行くなら、早池峰山登山を兼ねてみたら好都合かと愚考せり。早春の東北は悪くなかったよ。では…。

〔編集子注〕文中の佐藤博氏は昭27入学とともに山岳部入部、2年生までは活発に部山行に参加。針葉樹会員とはならなかったが昭27入学の山岳部同期オーション会の準メン

バーでした。やはり同期の故中村幸正氏が元気な頃、佐藤氏を訪ね旧交を温めたことがありました。山岳部同時代人にはよく知られた「ゲッコウの曲」は佐藤氏が初めて部員の前で故郷岩手県の四季の歌として歌ったものです。

加地 幸雄（昭33年）

小生、現在研究論文の仕事に追われ、約束の氷河公園縦走の記事書けません。7月の末までにお手許に届ける所存です。今夏の大分水嶺の山行は少なくとも3回（約150マイル）できれば4回、引退後は年に4、5回を考えています。モンタナ州の前途まだ500マイルほどありますが、頸を長くして次の州ワイオミングをもくろみはじめました。引退は来年7月の可能性を考えておりますが未定です。（中略）いつか時間を見付けて塩湖城におでかけ下さい。（中略）ユタ州の南部には赤岩の景色を誇る国立公園がいくつかありますが、夏は炎熱地獄、3月から4月、10月から11月が最適のようです。（中略）ユタ州から北上しますと比較的近い国立公園はGrand Teton と Yellowstone です。7月と8月は人混みしますが、一步奥地へ入るとそれ程でもありません。ちなみに大陸分水嶺はYellowstone 公園を横断しています。分水嶺はそこから東南下してWind Rivers という素

敵な山岳地帯を通過します。（中略）塩湖城はスキーツアーにも好いところですが、今冬は多忙に過ぎてたった1回です。スキーでしたら私の引退後にお越し下さい。今日オリピック Nordic Races の行われている Soldier Hollow にもよかったですらお連れします。Timpanogos 山塊が背景になっておりますからその山をテレビでご覧になったかもしれません。お大事に。

〔編集子注〕聞きなれない塩湖城とは加地さんが住むソルトレイクシティのこと。こういう表現をご存じない若い方にアメリカの都市を漢字で表現する別例を示すと、例えばワシントンは華府、サンフランシスコは桑港、ロスアンゼルスは羅府などなど不思議な表現。

計報

榎瀧明（昭17年卒）氏が去る5月1日に亡くなられました。ご長男の嘉行氏より左記のようなご連絡をいただきました。

「去る5月1日に榎瀧明は病没いたしました。夏の北アルプスの素晴らしさや冬山で遭難死した部員の悲しみ等、30年以上前に私は父より聞かされたことがありました。若かりしころ山を愛し、晩年、殊に如水会の学友との語らいを楽しみにしていました父の戒名には「愛山」と「如水」の四文字が入っております。長年月お世話になり大変ありがたいございました。」

一木会通信

「一木会」と称し、有志で月一回毎月木曜日の午後6時過ぎより、如水会館の14階のバーで集まるという話が新年会でまとまり、初回は2月7日に開かれました。

針葉樹会一木会（月例山行連絡会）報告

2002年2月14日 15時半

山行幹事の呼び掛けに応じて2月7日は10名の会員が集まり、最近登った山、今年登りたい山など四方山話に興じました。この会合にたくさんの方が集まり、長続きするように、簡単な記録をお配りします。忙しくて2月に来られなかった方も3月7日にはお出でください。皆様の発言要旨、飲みながらのメモに頼っているので間違いはご容赦下さい。

（文責・山本健一郎）

出席者

石井左右平、佐藤恭、上原利夫、市畑進、山本尚偵、三井博、高橋信成、竹中彰、西牟田伸一、山本健一郎

石井

山崎拓さんの選ぶ山は渋い凝った山が多い。明るくおらかな山にも行きたい。日帰りが多いが、暖かになったら泊りがけで雲取山に行きたいが、同行者を求む。

上原

テントや寝袋持参の山は敬遠する。まだウィークデイは無理。

高橋

白馬三山、富士、高峰高原から浅間に登った。（峰の茶屋からのルートはまだ入山禁止）月一回は丹沢などに出かけている。昨年白馬に行ったので今夏はその先の五竜を計画、また12月にはネパール。

佐藤

来月70歳、年に3回くらい南北と中央アルプスのまだ登ってないところへいきたい。昨年行ったネパールは良かった。宮之浦岳に行く予定の人は誘ってほしい。たまにはピッケルとアイゼンの山にいきたいので、赤岳鉱泉に泊まり、赤岳に登るのはいかがか。（赤岳は3・26〜28希望者は佐藤か山本へ）

竹中

休みのない会社にいるので大弛峠越えのドライブをして四阿山へ登った。いずれ時間がとれるようになったら北アルプス、穂高周辺などに行きたい。

三井

恵那山、大山、荒島岳などに行った。霧島山、開門岳、韓国岳にも。男体山、宮之浦岳（6月）に登りたい。夏は羅臼と斜里を計画している。また台湾の山に関心あり。さつそく佐藤さんより質問、また既に登った高橋君より、6月は天気が悪い11月から先の冬が晴天に恵まれるとのアドバイスあり。なお三井君は東京に戻りました。

〒182-0003

調布市若葉町1-16-84

Tel 03-3309-9910

金子（メール参加）

旧正月にミニヤコンカの麓に行ってきた（本誌参照）。その折、中村先輩の馴染みのガイド張さんに出会い四姑娘に日帰りで行こうかと手配しかかりましたが、天候悪化とのことで断念、いずれ大姑娘5000mを登りがてら出かけてみたいと思っています。どなたかご興味有りせばお知らせください。時期は国慶節休みの10月上旬です。

高橋信成

奥多摩と丹沢のランニング登山をしている。金子君がいないので、兵藤、佐藤活君と登っている。9月に穂高とか後立山に行きたい。

山本さんから報告用の手紙を受けましたので、連絡します。次回の山行連絡懇親会は、3月7日(木)です。18時頃から始めます。場所は、如水会館14階倶楽部です。

4月4日(木) 午後6時より
於…如水クラブ

出席者…石井左右平、山崎拓、石原修、高崎治郎、中川滋夫、山本尚偵、三井博、高橋信成、竹中彰、山本健一郎(今回は10名が出席、石原、高崎、中川の諸氏が初めて顔を見せました)。

石井

雲取山、1泊で5月に行きたい。

山崎

先月風邪のため中止した三方分山は5/22(月)に行きたい。高尾発7:48の河口湖行きで河口湖駅に9:26着、タクシーで精進湖に行き、女坂峠から登る予定。タクシー予約の都合あり、ご連絡ください。また白山に5月か秋に登りたいので、誰か興味ある人は連絡してほしい。

石原

このシーズンは20日?くらい滑った。5月の連休は野辺山に行く予定。

中川

シンガポールより帰任、週3回程東京事務所に出で、月1回シンガポールに出張している。

山本尚

ヤロー会で6月初旬仙丈岳に行く計画を立てている。戸台から途中までしかバスが入らないので北沢峠まですこし歩くことになる。7月始めに早月尾根に行く予定。

三井

種子島は佐薙・山本も予定しているので、日程が合えば一緒に。またお盆の斜里岳・羅臼岳についても推進中。

高橋

4月13日ユースンに泊まり、14日蛭ヶ岳に登る予定。別に案内済。新松田午後1時発のバスに乗る予定。(金山乗越へのルートは荒れている。石原)

山本健

3月27日雨のなか赤岳鉱泉に行き、28日地蔵尾根上部は鎖も梯子も埋まり、ピッケルとアイゼンの錆落としができた。北アルプスが乗鞍から白馬まで見えた。佐薙さんは5月岳沢から前穂に登りたいと意気軒昂。3月24日丸山君とテニスをしました。ジョインしたい近辺の方、丸山君まで。幹事の近藤君は甲府に再就職したようです。山行幹事増やさなけ

ればなりません。やって下さる方ご連絡下さい。

念のため繰り返しますが5月の一木会は9日、第2木曜日です。(山本健 記)

2002年5月9日 午後6時より

場所…如水会館14階 一橋クラブ

出席者…石井左右平、山崎拓、佐薙恭、三井博、高橋信成、竹中彰、山本健一郎

山の報告

石井・山崎・山本

4/22 三方分山へ行った。精進から女坂峠まで45分、峠から頂上まで45分。その後パノラマ台まで意外に瘤があつた。快晴で富士がよく見えた。

三井・竹中・山本

4/28八子が峰散歩、4/19蓼科山。蓼科山から槍・穂から白馬まで見えた。松尾君のところは満員。当分潰れそうにないので秋の懇親山行は大丈夫。中川・小林・大・遠藤の諸兄が男体山に登り、中川君は復活宣言をした由。三井情報。

佐薙

千葉の富山(350m)と伊予が岳(337m)が70歳台最初の山。

兵藤・佐薙

4月下旬会津駒とひうちにスキーで行ったはず、天気にも恵まれたのでは。

山本

平が岳について

昨年8月小出の日本山岳会員桜井昭吉氏に誘われて平が岳に登りました。桜井氏は昭和37年、藤島敏男さん深田久弥さんと平が岳に登っています。この時は3日目の夕刻ようやく頂上に立ち、人里に着いたのは5日目の午後だったようですが、私は日帰りでした。楽をして申し訳ない気がしますが、皆さんからご照会がありますので、からくりをお話します。銀山平の「伝の助小屋」などの民宿で数人まとまれば、中の股川の林道を玉子石まで約2時間の所までマイクロバスで送迎してくれます。前夜泊まるのが条件です。私は伝の助小屋に泊まり午前4時出発、6時に林道の終点に着きました。かなり長いドライブです。6時半に歩き出し玉子石を往復、池の岳にも登り平が岳に10時過ぎに到着、林道終点に12時過ぎ帰着しました。8月20日、台風襲来直前、関東平野は雲海の下でしたが、富士山、秩父などの山々は武尊の右に頭を出しており、巻機、苗場、白馬なども見えませんでした。例年林道が通れるようになるのは7月、10月中旬までの運行です。人数がまとまればバスは貸切

(3万5000円) 出来ます。少なければ他のパーティと相乗りです。運行する日を調べ予約すればよいでしょう。金曜に仕事が終わってから浦佐まで新幹線でいき、タクシーに乗れば銀山平は簡単にいけます。

伝の助小屋 TEL/FAX 02579-5-2452

村杉 TEL/FAX 02579-5-2451

山の予定

佐薙

岳沢か五竜へ行くので同行者を求む。週末なら竹中君が同行可能。5月最後の週を予定。竹中君はアイゼンを購入する由。お二人に連絡してください。

石井・山崎

5月下旬か6月上旬雲取山に行きます。上で一泊の予定。お二人にご連絡下さい。

山崎

8月下旬白山に行きたい。お盆過ぎれば、室堂も空いてくる。

佐薙

9月槍・穂の縦走、氷河公園を訪れ、キレットを通る。また、オーション会は早池峰に登り、同期の佐藤氏(三陸山田湾でホテル経営)の遺族を訪問する。

山本

昨年と同じ頃、蓼科ベースで懇親山行を企

画したい。

佐薙

11月宮之浦岳と種子島。いずれ笈にも生きたい。

お願い

一木会はだいぶ軌道に乗ってきました。楽しみにしてくださる方も増え、忙しくて出られない方もこの記録に目を通していただけるようです。ここ何回かの反省ですが、出られない方がどこに登ったのか、どこに登ろうとしているのか分らず載せられません。出られない方からの情報が載れば、もっと中身の濃い記録が出来そうです。

今月の記録をお読みになった皆さん

1. この夏どんな計画をお持ちなのか
2. この山の情報がほしいが、誰か登っていないか
3. 俺はこんな山に登ったぞ

など一言メールかFAXで山本か高橋にメッセージをお送り下さい。電話でも結構です。

次回は 6月6日(木)です。如水会館14階のクラブに6時過ぎから集まっています。

編集後記

*このところ原稿の入手に苦勞し始めています。ところが「犬も歩けば棒にあたる」、「編集子も歩けば原稿が手に入る」、所用で久し振りに国立の町を歩いていると例の違法建築でもめている新築マンションの前で反対運動をしている宗像氏（平12卒）の姿を見かけました。立ち話の後、別れ際に会報の原稿を頼むと、何と翌日にはEメールでフレッシュかつダイナミックな原稿が届きました。当日は更に数分歩くと大学正門前で南名誉教授（昭32卒）とばったり。最近山歩きを楽しんでいるとのこと。こちらにも原稿を依頼。心やさしい南氏のこと、次号にはきつと登場される筈、乞うご期待。そして南氏に限らず日頃会報にあまり登場しない方々からの原稿、そしてこれはという山行の記録など、首を長くして期待しています。よろしく。（佐薙）

*今号は会員の追悼がなくてよかったですねと佐薙さんと話していたら、校了間際に樫淵さんの訃報が飛び込んできました。ご冥福をお祈りいたします。次号に追悼文を掲載したいと思しますのでご協力をお願いいたします。

（井草）